

音の歴史とビクター

(社内研修用)

日本ビクター株式会社

人材開発センター

(目 次)

蓄音機の起源	2
円盤型の発明	6
米ビクターのスタート	8
特許抗争の激しかった 1800 年代末	11
赤盤の成功	12
最初のジャズ・レコード	13
各社の動きーアメリカ	14
ーヨーロッパ	15
日本の蓄音機の夜明け	16
松井須磨子の「カチューシャの唄」	18
大正期の歌	20
大正期のレコード会社	22
大正期の蓄音機業界	24
日本ビクター蓄音機株式会社創立前後	26
ラッパ吹き込みから電気録音へ	28
赤盤と邦人歌手	30
レコード流行歌とビクターの独走	32
古賀メロディーの出現	34
ラジオ放送と蓄音機の競争	36
工場設立後の日本ビクター	37
昭和 10 年代ー第二次世界大戦時代	38
昭和 20 年 8 月 15 日戦争は終わった	40
昭和 30 年代ー SP の終焉とステレオ・レコード	42
音場への挑戦ー昭和 40 年代	44
昭和 50 年代ーレコードの音質改善と CD 出現	48
デジタルの花開くー昭和 60 年代	50

音の歴史とビクター

犬のマーク

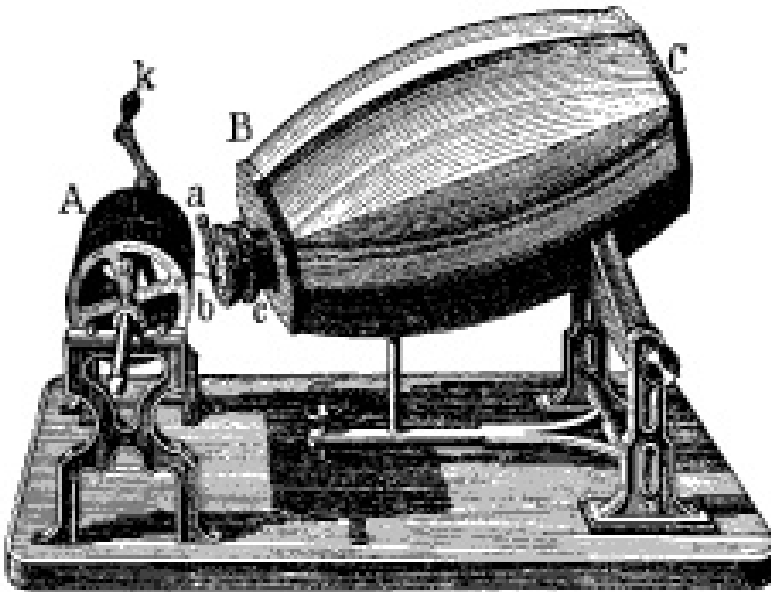
それは音の歴史である

我々の祖先の情熱を

絶やすことなく

永遠に続けよう

蓄音機の起源



レイン・スコットのフォノートグラフ
蓄音機に先行する記音装置（1857年—安政4年）

「音を記録・再生する機械の発明」——これは1878年2月19日米国特許としてトーマス・エジソンに与えられた。エジソンは1877年7月18日に、パラフィン紙に針で音を記録することに成功しており、蓄音機としての発明はそれ以後であるが、最初の錫箔器の実験成功の日時は定かでない。

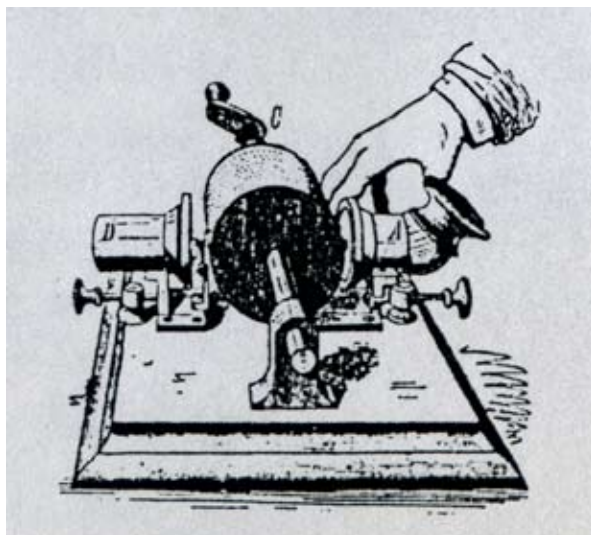
1877年12月22日の「サイエンティフィック・アメリカン」誌に、「音を言出し再生する装置」として記事掲載があり、成功が確認されている。特許出願は12月24日である。

当時は「音の記録」には別の目的があって、電信の信号音を記録して後で解読する上図（レオン・スコットのフォノートグラフ）の機械も既に発明されていた。この機械は回転できるドラムの表面に塗った煤に、針先で電信音を記録している。

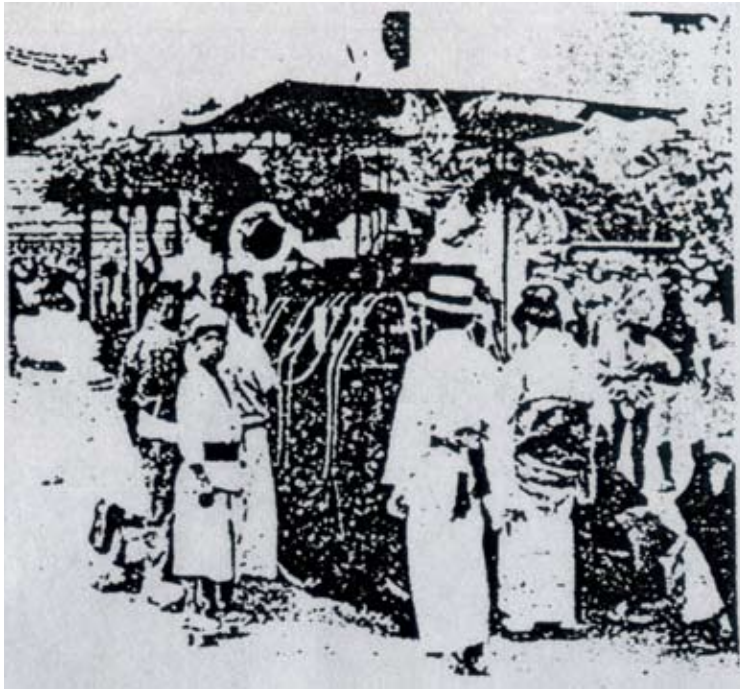
エジソンは「電信音が記録できるのなら、電話音も記録できる筈だ」と考えて発明に取り組んだとも言われている。



また、エジソン同様蓄音機の原理を考えていた人は他にもいた。フランス人シャルル・クロが1877年4月30日にパリの科学アカデミーに供託した論文がそれである。内容は音の記録・再生について述べているが、貧乏科学者だったため特許出願費用の調達ができなかったようである。



ゴム管を耳にさして聞く（明治四十二年十月「風俗画報」）



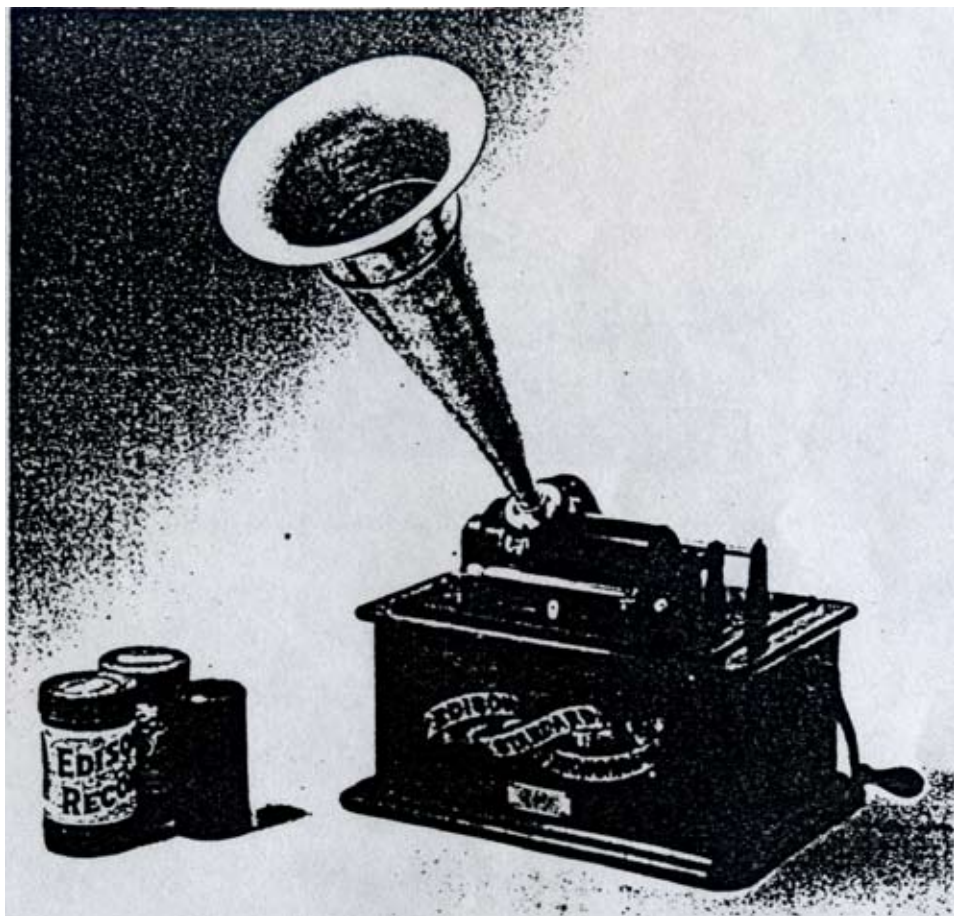
エジソンはこの蓄音機を「フォノグラフ」と呼び、その利点として1878年の「ノース・アメリカン・レビュー」誌で

- | | |
|-----------|-----------------|
| ①速記等の書き取り | ⑥ミュージック・ボックス、玩具 |
| ②盲人のための本 | ⑦時計のアナウンス用 |
| ③話し方の教授 | ⑧種々の言語発音の保存 |
| ④音楽の再生 | ⑨教育上の説明 |
| ⑤遺言等家庭の記録 | ⑬電話の音声記録 |

を挙げている。事務所での「メモ録音」に積極的であった。

1878年1月24日には「エジソン・スピーキング・フォノグラフ会社」を設立し、フォノグラフの生産と展示を管理することを始めている。

しかし、錫箔器は実用性で問題が多く、1885年6月27日に特許出願されたチチェスター・ベル（電話の発明者グラハム・ベルの従兄弟）とティンターによるワックス円筒の発明までは、見捨てられた時代であった。ベル＝ティンターの機械は「グラフィフォン」として1887年に公開されている。



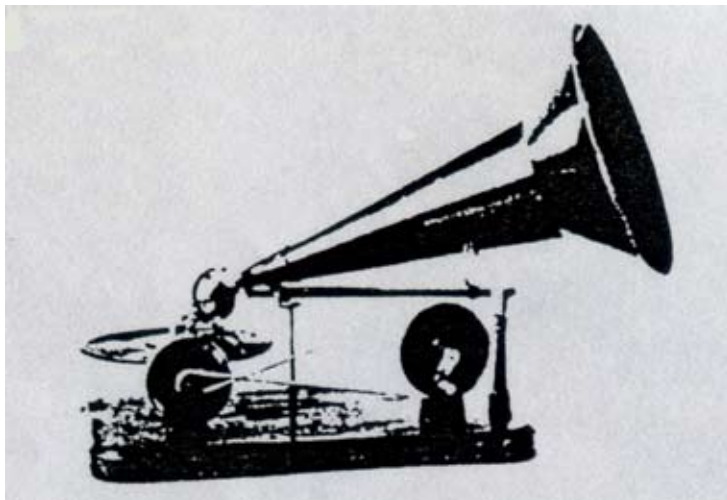
ワックス円筒の出現で、錫箔より数段寿命が伸びたので、再び蓄音機が人々の興味の対象となった。

上の写真は、「エジソン・モデル B」型である。演奏時間はスタンダードで2分間、後年発売された長時間のもので4分間であった。(回転数 60 回 / 秒)

前ページの写真は、街頭で1曲いくらかで聞かせていた当時の状況である。現在の旅客機内の音声管と同じように耳に差して聞いていた。

円筒型は円盤型が発明されてからも、蓄音機の生産が続けられていた。ソフトの量産が困難なこともあって、1913年10月にはエジソン自身が円盤型へ切り替えているが、1929年11月にレコード事業をやめるまで円筒型ソフトの供給は続けている。

円盤型の発明



明治 27 年（1894 年）ころのベルリナー手回し蓄音機。

現在のレコードの形は円盤型であるが、これを発明したのはエミール・ベルリーナである。特許申請は 1887 年 9 月 26 日で、エジソンの発明から 10 年後である。

「グラモフォン」と名付けられたこの蓄音機は、レコードの形状が違うだけでなく、記録溝の変化が横振動（水平刻み）となっている。円筒型は縦振動（垂直刻み）であった。

円盤型の最大の利点は、金型を使って大量の複製盤を容易に作れる点にある。円筒型では、録音済の円筒を再生しながら、再生振動をそのまま新しい円筒に刻む方法のため、複製に手間取り長時間を要していた。

右図は金型録音をしている状況であるが、亜鉛板を薄い脂肪性のフィルムで被った原盤に、録音針で溝を付け（フィルム部分）、酸の溶液に 15～20 分つけると、溝部分の亜鉛が溶けて金型ができる工程のものである。

大量生産は、この原盤から金属原盤をつくり、硬質ゴムにスタンプすればレコードになるとここまで発明し、1893 年「米国グラモフォン会社」を設立し、商業ベースの開発にのりだしている。1894 年の年末に 7 インチ盤、演奏時間 2 分で発売された。



仕事部屋で自己の原盤をチェックするベルリナー

このレコードは1枚50セントで売られ、1本1ドルの円筒型より安かった。本格的な商業化は、1895年10月8日に「ベルリナー・グラモフォン会社」が設立されてからである。



米ビクターのスタート

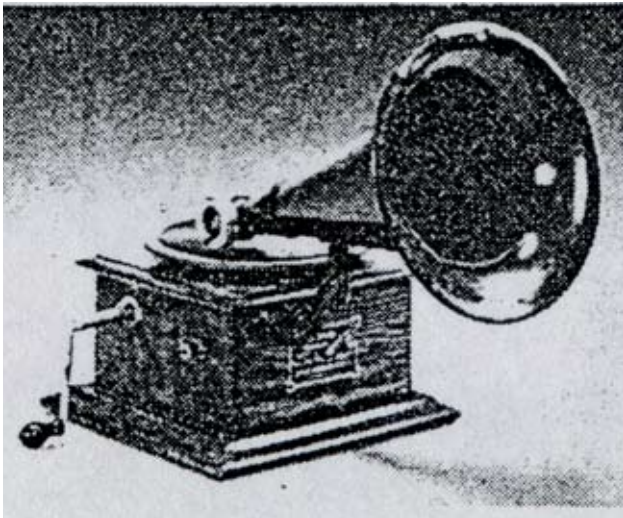


蓄音機への期待は、ヨーロッパでも強く、フランス人パテ兄弟は1894年より、円筒の生産を開始していた。

1898年5月に英国に「グラモフォン会社」を設立したウィリアム・バリー・オーエンは、ベルリーナの特許権をヨーロッパに売り込

むため前年に渡英してきたが、結局自分で会社を興し米国から蓄音機は輸入、レコードは1899年から生産を開始している。

1899年のある日、英グラモフォンの事務所に、蓄音機のホーンを借りたいと言う紳士が現



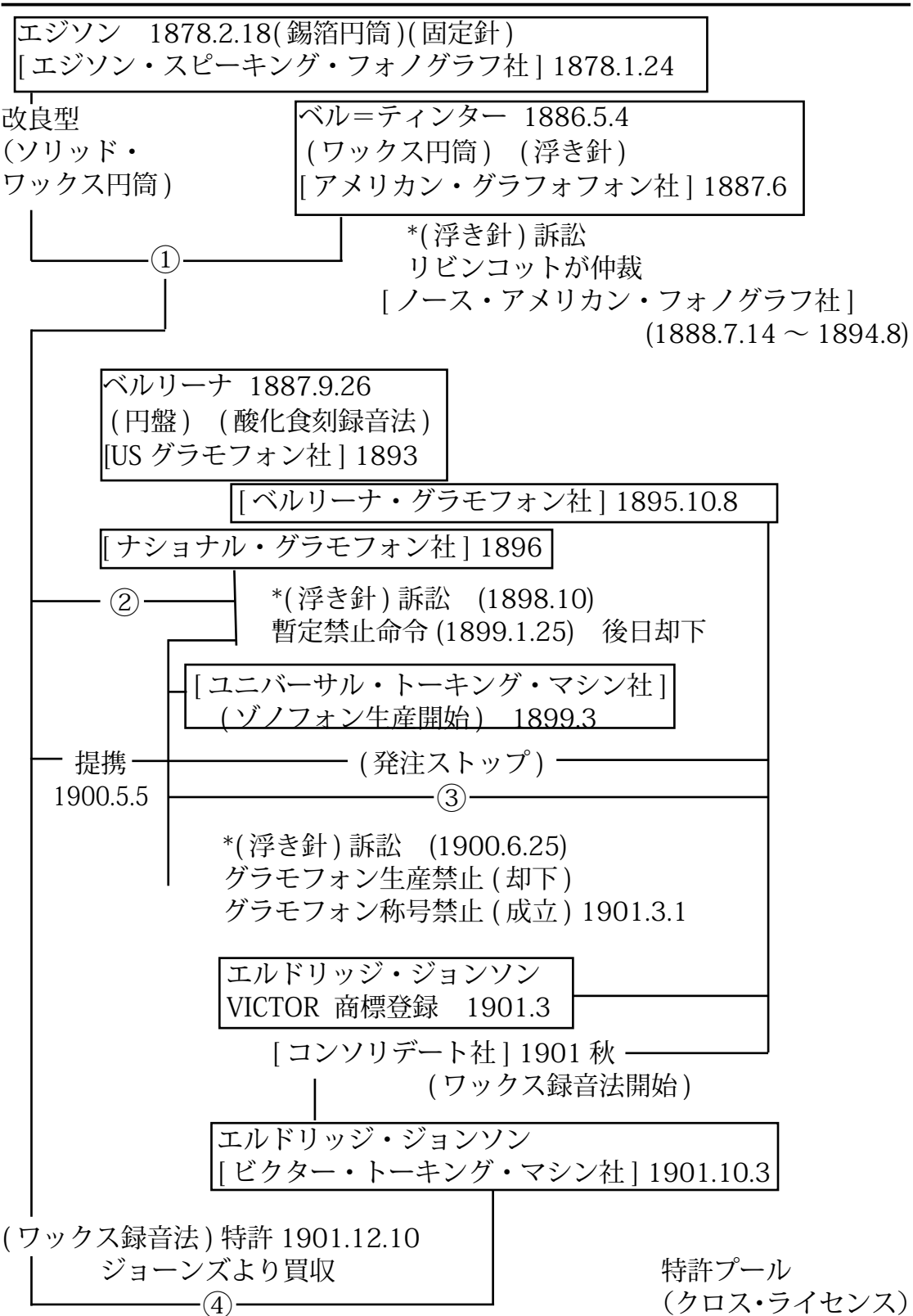


われ、数日後に前ページの絵を持参した。オーエンは蓄音機を円盤型に書き換えれば買おうと約束し、10月18日に届けられたのが上の絵である。フランシス・バラウドという王立アカデミーにも出品している画家であったが、既にエンジェルをマークにしていたので、クリスマス・セールのパスターに使われただけであった。

バラウドの兄が生前可愛がってた「ニッパー」(フォックス・テリア犬)が、兄のレコードの声を懐かしがるのを見て、この絵は書かれたという。翌年渡英したベルリーナが、非常に気に入入り、1900年7月には米国商標権を獲得している。

米ビクターは1901年10月3日に、エルドリッジ・ジョンソンを社長に設立されているが、「ニッパー」の絵が商標として使われたのである。(VICTOR TALKING MACHINE CO.)

前ページの蓄音機は当時の製品である。



特許抗争の激しかった 1800 年代末

商売になりそうな新発明があると、その後続くのは特許の争いである。特にアメリカでは激しく、僅かのことでも弁護士
の告訴は続くが、①～④はそれを如実に表している。

①は円筒同志であるが、改良型エジソン機が「浮き針」を使
っていたことで発生したものである。「浮き針」というのは、
雲母の振動板に針を付けたもので、柔らかい動きをするので音
が良い。

②は円盤型蓄音機の売れ行きが良いのを見て、グラフォフォ
ン社がナショナル・グラモフォン社を相手に、「浮き針」の特
許侵害を告訴したものである。一度は暫定禁止命令がだされ
ナショナル・グラモフォン社のシーマン社長は再審を申請し撤
回された。しかし、彼はベルリーナ特許に疑問を持ち、子会社
を設立して円盤型蓄音機（ゾノフォン）の生産を始めた。

また後日、グラフォフォン社の「浮き針」特許を認め、ベル
リーナに反抗しグラフォフォン社と提携する。

③はベルリーナ・グラモフォン社に対して、シーマンが提訴
したもので、グラモフォン商売を止めろというものである。も
ちろん、理由は「浮き針」特許侵害である。結果は、生産・販
売はよいが「グラモフォン」の商標を使えなくなった。

④は訴訟でなく話し合いとなったが、ビクターが設立されて
すぐ、ジョンソンが使っていた（ワックス録音法）の特許が、
ジョーンズという無名の人に認可されグラフォフォン社が買
い取り、ビクターの特許侵害が明らかとなった。

一方グラフォフォン社は円盤型蓄音機の生産へ乗り出さざる
を得なくなり、ベルリーナの特許が必要であった。

この双方の望みをかなえるには、特許をプールしてお互いに
使えるようにする以外には途がなかったのである。

赤盤の成功



特許問題が一段落した後のビクターは、円盤型の人気のお陰で売上急上昇の時代を迎える。

特に、赤いレーベルを使った名演奏家シリーズ（通称・赤盤）のレコードは、投資の即時回収はできないものの、大成功であった。

最初の赤盤は、エイダ・クロスレーという女性歌手で、カーネギー・ホールの1室で1903.4.30に録音されたが、米国で後日名声を

上げた歌手ではなかった。（片面盤）

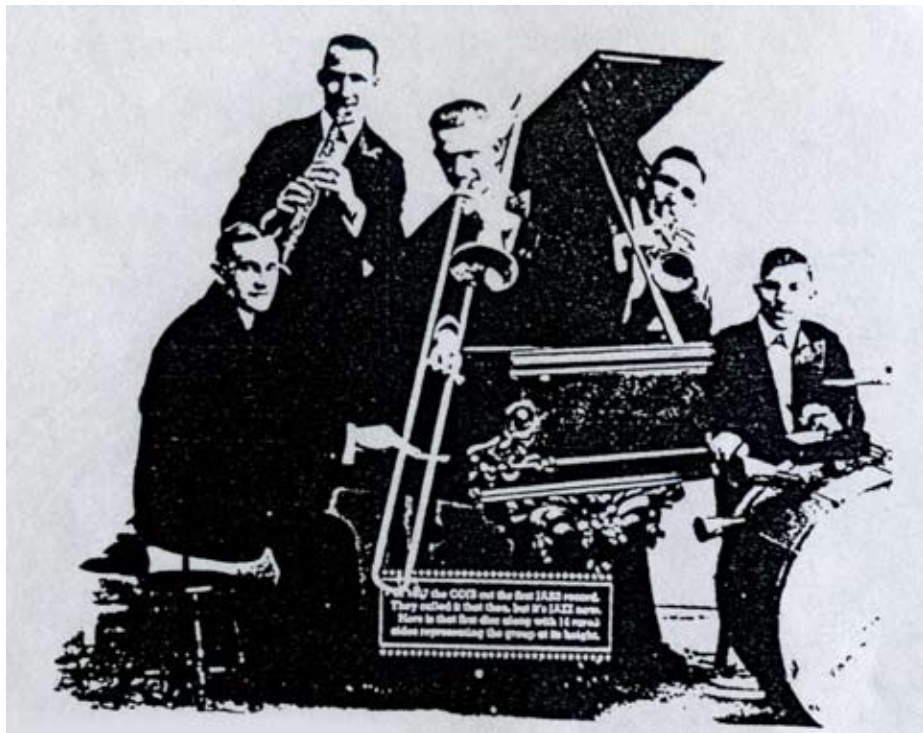
赤盤歌手として最初に有名になったのは、エンリコ・カルーソである。彼はイタリア・ミラノのスカラ座で名声を上げていた、オペラのテノール歌手である。（カルーソの最初のレコードはミラノのホテルで英・グラモフォンに1902.3.18に録音）1905.2.1に録音した後、専属契約を行っている。

ビクターはメトロポリタンの主要歌手（メルバ、ファーラー、スコッティ等）を全て専属契約していたので、コロンビア・フォノグラフ社は対抗できなかった。

なお、赤盤の両面盤は1924年になって発売された。



最初のジャズ・レコード



オリジナル・ディキシーランド・ジャズ・バンド

ジャズはブラス・バンド（街頭パレード、野外ダンス演奏）から始まったと言われる。黒人ブラス・バンドは好んで流行歌を演奏したが、これが転化したものである。

最初のレコードは、1917. 2. 26にオリジナル・ディキシーランドジャズ・バンド（ODJB）がニューヨークで録音し、5月に発売されたビクター盤である。曲は「リヴァリー・ステイブル・ブルース」と「ディキシー・ジャズ・バンド・ワンステップ」の組合わせである。このレコードはニューオリンズのジャズ博物館で、公式に「史上最初のジャズ・レコード」とされている。同バンドは少し前にコロンビアに録音していたが、音質の面で発売が延期されていたので、デビュー盤となった。リーダーのニック・ラロックはニューオリンズ生まれの白人で、ニューヨーク一番乗りのジャズ・バンドであった。

各社の動きーアメリカ

エジソン 1900年代初頭には、円筒レコードの需要はまだ強かった。価格が1905年で、10インチ円盤1ドル（最安品）に対して、35セントということもある。1908年に4分のアンバロール・レコードも発売したが、結局1913年に円盤（垂直刻み）を発売した。1929年撤退するまで円筒の生産は続けている。

コロンビア アメリカン・フォノグラフ社の地域販売会社であるコロンビア・グラフォフォン社が成長したもの。

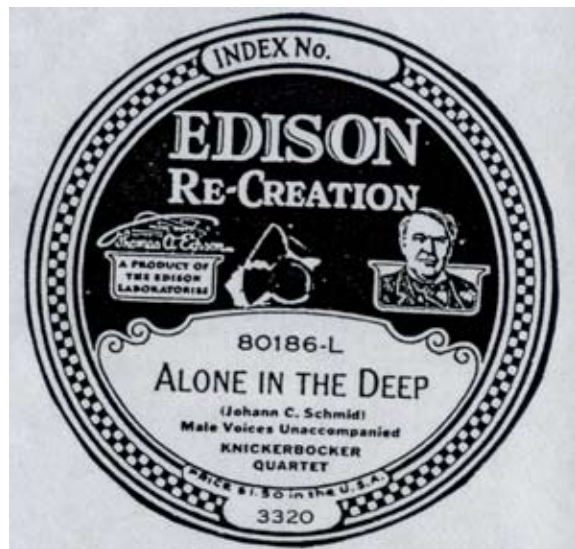
円筒を生産していたが、1902年より円盤生産、1908年両面盤発売するも演奏家不足で、1920年頃は瀕死の状態。

1925年に英コロンビア・グラフォフォン社に買収された。

ビクター 業界トップの地位は豊富な優秀演奏家の確保の結果であった。赤盤が成功したのである。1914～1918年の第一次世界大戦では、カムデン工場が軍需工場となり、戦後1年間は苦い目を見たが、1920年には業績が非常に良かった。

1922年に始まったラジオ放送は、レコードの敵としてみられ1929年にRCAに買収されている。

なお、1914年に蓄音機の基本特許の期限が切れると、数多くの参入があり、1916年には、ブランズ・ウィック、ソノーラ等46社があったといわれる。



各社の動きーヨーロッパ

ヨーロッパはアメリカ以上に需要が活発であったため、多くの会社が乱立している。

イギリス 1892年にエジソン・ベル・フォノグラム社が円筒の輸入販売を開始しているが、1898年のグラモフォン社の設立が本格化のスタート。1900年コロンビア・グラフォフォン社も



ロンドンにヨーロッパ本部を

設けた。グラモフォン社は1901年に赤盤を発売、米ビクターと1903年に販売契約を結んでいる。1907年からニッパ・マークも使っている。

1931年にグラモフォン社とコロ

ンビア・グラフォフォン社が合

体して、EMIとなった。1929年にデッカの設立もある。

ドイツ 1897年パーロフォンが設立されているが、1898年のグラモフォン設立で本格化。1903年にオデオンが設立され両面盤発売（1904）、本格的管弦楽レコード発売（1909）等を行っている。1904年設立のカール・リンドシュトレーム社はパーロフォン（1910）、フォノテビア（イタリア・1911）等を買収していたが、1926年コロンビアグラフォフォン社に買収されている。

フランス 1894年パテ兄弟が円筒レコードの生産を開始したが、1906年には90回/分の垂直刻み円盤レコードを生産。1908年から通常円盤にする。1927年にコロンビアに買収された。

日本の蓄音機の夜明け

日本に蓄音機の情報が入ったのは早かった。エジソンが発明してから1年後に東京大学で実験されている。また、アメリカと同じく街頭での蓄音機屋が商売になったようである。

しかし、本格的になったのは、矢張り円盤レコードの輸入が開始されてからである。米コロンビアが先に輸入され、米ビクターは少し後れている。

洋楽しかない状態では、販売も伸びないので、アメリカから技師を呼んで邦楽を録音する、出張録音も行われた。

国内でも生産しようということで、日米蓄音機製造株式会社がスタートしたが、製造技術は独自に研究したようである。なお、日本蓄音機商会は現在の日本コロンビアの前身である。

日米蓄音機は資本金10万円でスタートし、日本蓄音機商会は100万円の資本金と急成長したが、ニッポノホンのレコードの種類で分かるように、一般大衆の好むものと適っているので、蓄音機の普及は次の時代になってからである。



明治時代・日本の蓄音機とレコード

西暦 (明治)	蓄音機とレコードの動き
1878 (11) 11.16	東京大学講師ユーイングが、フォノグラフを実験
1879 (12) 3.28	ユーイングが東京商法会議所で、フォノグラフを公開
1889 (22) 1.20	鹿鳴館でグラフオフィンの試聴会開催 (伊藤博文ら出席)
1890 (23) 6.6	エジソンが蓄音機を明治天皇に献上
1896 (29) 12.27	横浜のプルウル兄弟商會が蓄音機を発売
1897 (30)	ゴム管で聞かす大道蓄音機屋が各地で繁盛
1898 (31)	玉屋、天賞堂が蓄音機を発売
1901 (34)	三光堂が米グラフオフィン蓄音機発売
1902 (35)	三光堂が米コロビアの大声発音器を発売
1903 (36)	[英グラモフォン出張録音] [米コロビア出張録音] 十字屋が蓄音機発売
10.27	天賞堂が米コロビアから円盤レコード初輸入 (11.8 発売)
1904 (37) 1.20	三光堂が英グラモフォンの円盤レコード輸入
1905 (38)	天賞堂が米コロビア出張録音盤を発売
1907 (40) 10.31	日米蓄音機製造株式会社設立 [米ビクター出張録音]
1908 (41) 6	三光堂が米ビクター・レコードを輸入
1909 (42) 5	日米蓄音機が国産初の円盤レコード発売
1910 (43) 1	天賞堂が米コロビア両面レコードを輸入
4	日米蓄音機が朝顔型蓄音機を発売
10.4	日米蓄音機製造株式会社が日本蓄音機商會として 発展した (ニッポノホン = NIPPONOPHONE)

ニッポノホンのレコードの種類：(42.9 ~ 45.7)

区分	種	区分	種
唱歌	33	義太夫	206
薩摩琵琶	31	浪花節	61
筑前琵琶	21	端唄	16
長唄	45	小唄	74

松井須磨子の「カチューシャの唄」

日本の蓄音機普及の端緒となったのは、この「カチューシャの唄」である。1914（大正）年京都にあったオリエント・レコードから発売されると同時に2万枚、最終的に27万枚を売ったという。松井須磨子が伴奏なしで唄っているが、仮にも上手とは言えないレコードである。

松井須磨子は前年、島村抱月と「芸術座」を創った女優で、歌手ではなかった。大正3年3月下旬、帝国劇場で第三回公演として「復活」を上演するとき、抱月が前から考えていた劇中歌を須磨子に唄わせ、流行させて人気を上げるのを実行するため、抱月の書生であった中山晋平に作曲させたものである。



カチューシャの唄（島村抱月・相馬御風詩／中山晋平曲）

- | | |
|---|--|
| ①カチューシャ可愛いや別れのつらさ
せめて抱雪とけぬ間に
神に願ひをララかけましょか | ⑥カチューシャ可愛いや別れのつらさ
暗いつめたい牢（ひとや）の床に
夢はむかしのララ香に迷ふ |
| ②カチューシャ可愛いや別れのつらさ
今宵一夜に降る雪の
明日は野山のララ道かくせ | ⑦カチューシャ可愛いや別れのつらさ
せめてのこせし絵すがたに
吹くなこがらしララ降るな雪 |
| ③カチューシャ可愛いや別れのつらさ
せめて又あふそれまでは
同じ姿でララ居てたもれ | ⑧カチューシャ可愛いや別れのつらさ
さらば別れとともづなとけば
これがこの世のララ生き別れ |
| ④カチューシャ可愛いや別れのつらさ
つらい別れの涙のひまか
風は野を吹くララ日は暮れる | ⑨カチューシャ可愛いや別れのつらさ
霧に見かへる島山くれて
行方しられぬララ船の旅 |
| ⑤カチューシャ可愛いや別れのつらさ
広い野原をとぼとぼと
ひとりいでゆくララ明日の旅 | ⑩カチューシャ可愛いや別れのつらさ
野辺の草葉の白露と
消えるはかないララ人の末 |



中山晋平は公演の成功が曲の流行に左右されると聞いて、非常に悩んだが、日本人が唄いやすい5音階（ヨナ抜き）で作曲した。注：4-7抜きとも言われ音階の4（ファ）と7（シ）を使用しない方法。

結果は大成功で晋平のデビュー曲となった。なお、須磨子の「復活」は計444回上演されている。

公演の成功に気を良くした島村抱月は、次々と劇中歌を取り入れている。「その前夜」の「ゴンドラの唄」（いのち短し恋せよ乙女・吉井勇詩・大正4年）や、「生ける屍」の「さすらいの唄」（行こか戻るかオーロラの下を・北原白秋詩・大正7年）—いずれも中山晋平作曲—は多くの人に親しまれている。

島村抱月は大正7年11月5日に、当時流行していたスペイン風邪がもとで亡くなったが、恋していた須磨子は支えを失い、翌8年1月5日縊死自決しているのを発見されている。満32才であった。

長野・松代町にある林正寺に、須磨子演劇碑があり「カチューシャの唄」が自筆で書かれている。（昭和28年建立）



大正期の歌

明治から大正に移っても、まだ「まっくろけ節」に代表される演歌が、多くの演歌師によって唄われていた。

唱歌の方は明治時代の学校唱歌を改善しようという動きがあり、今に歌われている名曲が多く出現している。特に童謡の分野には、大正7年鈴木三重吉が中心になって、発刊した児童雑誌「赤い鳥」や「金の船」の活躍がある。

後に、流行歌となる分野は、「カチューシャの唄」からスタートした〔劇中歌〕が映画の中で歌われるようになり、演歌師の活躍とともに広く歌われるようになった。

当時のレコードは、新曲の発表場所ではなく、流行しだしてから録音が行われるという状態であった。「船頭小唄」も作曲された大正9年にはあまり唄われず、10年にレコード化されてもパツとしなかったが、鳥取春陽（演歌師）が街頭で歌い広め、またレコードに吹き込んだのが流行した要因といわれる。

この時期の歌手としては、世界的プリマドンナとして知られる三浦



「お嬢夫人! 2001回記念公演の頃。昭和11年。

大正	曲名	作詞	作曲	唄
2	早春賦	吉丸 一昌	中田 章	
2	城ヶ島の雨	北原 白秋	染田 貞	奥田 良三
2	まっくろけ節	後藤 紫雲	添田唾蟬坊	
*3	カチューシャの唄	島村 抱月 相馬 御風	中山 晋平	松井須磨子
*4	ゴンドラの唄	吉井 勇	中山 晋平	松井須磨子
6	ノーエ節			
*6	さすらいの唄	北原 白秋	中山 晋平	松井須磨子
*7	新金色夜叉の唄	宮島 郁芳	後藤 紫雲	鳥取 春陽
7	恋はやさしい 野辺の花	小林 愛雄	ズッペ	
7	コロッケの唄	益田 太郎		
		冠者		
7	浜辺の歌	林 古溪	成田 為三	
7	宵待草歌	竹久 夢二	多 忠亮	
9	メーデー歌	秋田 雨雀	栗林 宇一	
9	女心の頃	堀内敬三 訳	ヴェルディ	
*9	船頭小唄	野口 雨情	中山 晋平	中山 歌子
10	赤い靴	野口 雨情	本居 長世	
11	月の砂漠	加藤まさを	佐々木 すぐる	
11	砂山	北原 白秋	中山 晋平	
11	流浪の旅	宮島 郁芳	後藤 紫雲	
12	ペチカ	北原 白秋	山田 耕筈	
*13	籠の鳥	千野かほる	鳥取 春陽	歌川八重子
13	ストン節	添田さつき	添田さつき	
13	月は無情	松崎ただし 渋谷 白涙	添田さつき 鳥取 春陽	
			(編曲)	
14	あの町この町	野口 雨情	中山 晋平	

環がいる。オペラ「マダム・バタフライ」を生涯に2,000回も上演しているコロラチュラ・ソプラノ歌手である。大正4年渡英し認められ初演、世界各地で公演した。大正11年に半年帰国した時に録音している。非常な人気をよんでだが、その後も世界を旅し、昭和10年までに3ヶ月程帰国しただけであった。

大正期のレコード会社

大正時代に入ってからレコード市場は、ダンピングや複写盤の横行、悪徳セールスマンがはびこる等、混迷の時代を迎えた。更に、物価指数が大正3年比で7年が2倍なのに対し、賃金指数は1.5倍と不景気となる。

日蓄（日本蓄音機商会）でも6年500名の従業員がストライキに入っている。7年から業界も持ち直した。それと共に群小のレコード・メーカを併合して成長している。

オリエン特・レコード「カチューシャの唄」で瀕死の状態から立ち直った東洋蓄音器は大正8年に日蓄に併合されている。（レーベルは継続）

三光堂（ライオン印）、帝国蓄音器（ヒコーキ印）、東京蓄音器（富士山印）、スタンダード蓄音器も順次日蓄の傘下に入っている。（レーベルは継続）

日東蓄音器（ツバメ印） 大阪に大正9年創立したが、日

設 立 年	会 社 名	レーベル
1912 (明治 45)	日清蓄音器株式会社 大阪蓄音器株式会社	「白熊」印 (ナショナル)
1913 (大正 2)	東京蓄音器株式会社	「富士山」印
1914 (4)	東洋蓄音器株式会社	「ラクダ」印 (オリエン特)
1919 (8)	帝国蓄音器株式会社	「ヒコーキ」印 後に「スフィンクス」
1930 (9)	スタンダード蓄音器株式会社 日東蓄音器株式会社	「ツバメ」印
1921 (10)	東亜蓄音器株式会社 株式会社アサヒ蓄音器商会	「ハト」印 「ツル」印
1923 (12)	合資会社内外蓄音器商会 株式会社三光堂	「貝」印 「ライオン」印 「孔雀」印 「王冠」印

第1回文部省推薦レコード (大正12年4月23日)					
種目	数	種目	数	種目	数
童曲	31	長唄	5	新内	2
洋楽	16	薩摩琵琶	4	清元	1
端唄、小唄	12	筑前琵琶	4	常磐津	1
浪花節	12	謡曲	3	歌沢	1
童話	7	書生節	3	講談	0
義太夫	7	落語	3	その他	7
箏、尺八、三曲	7	演劇	2	(計)	128
メーカー別種目数					
日蓄	27	三光堂	20	日東	10
オリエント	14	東京蓄	30	日本教育蓄	2
帝国蓄	21	東亜蓄	14	日英楽社	1
(
曲目の例) 洋楽 シューベルトの子守歌 (三浦環)					
故郷の廢家、庭の千草 (関鑑子)					
端唄小唄 安来節 (天中軒雲月)					
正調江差追分 (見砂半月、近藤雷童)					

蓄の「ツバメ印レコードを扱う店には日蓄（ワシ印）レコードを出荷しない」という強行策にも、販売店が動じなかったので積極活動を進めている。12年には2万円の懸賞を発表して積極販売の攻勢をかけている。関東大震災は日蓄対日東の対立を結束させた。日蓄の本社焼失、川崎工場の倒壊の大被害の為である。

なお、文部省が社会教育の立場から「官選」のマークをつけ、優良レドを推薦し、俗悪撲滅を図っている。



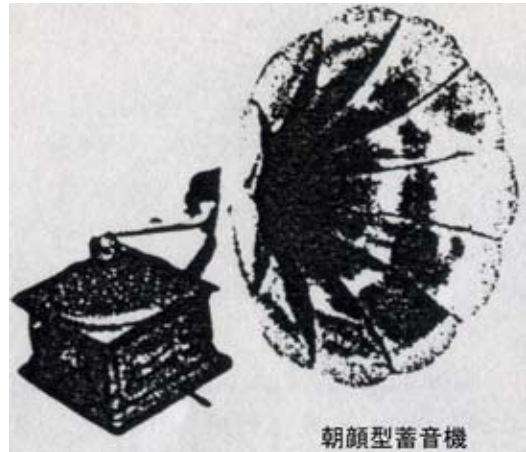
大正期の蓄音機業界

大正時代は、第一次世界大戦（3～7）、関東大震災（12）と景気を左右する事件が起きている。蓄音機類の輸入金額の推移を見ても、3年から7年までと14年以降の落ち込みが激しい。最初の落ち込みは、ダンピング等で前述した通りです。

蓄音機自体も形状がホーンむき出しのものから、箱型に移ったのもこの時期である。日蓄の蓄音機発売は朝顔（ホーン）型が明治43年4月、箱型（ユーホン）が翌44年6月である。大正2年頃からホーン型が減少し始め、10年の夏には箱型が流行したという。

12年の関東大震災は、景気の悪化を招いたが、政府も財政立て直しのため「贅沢品追放」の施策をとるが、蓄音機・レコードも贅沢品であると判定され13年7月31日より100%の輸入税がかけられた。9年から僅か4年間に5倍になっていたのが激減しているのをみても、影響が大きかったことが分かる。

更に、悪材料となったのは、米国で1920（大正9）年に始まったラジオ放送がある。日本では14年3月1日に東京で実験放



朝顔型蓄音機



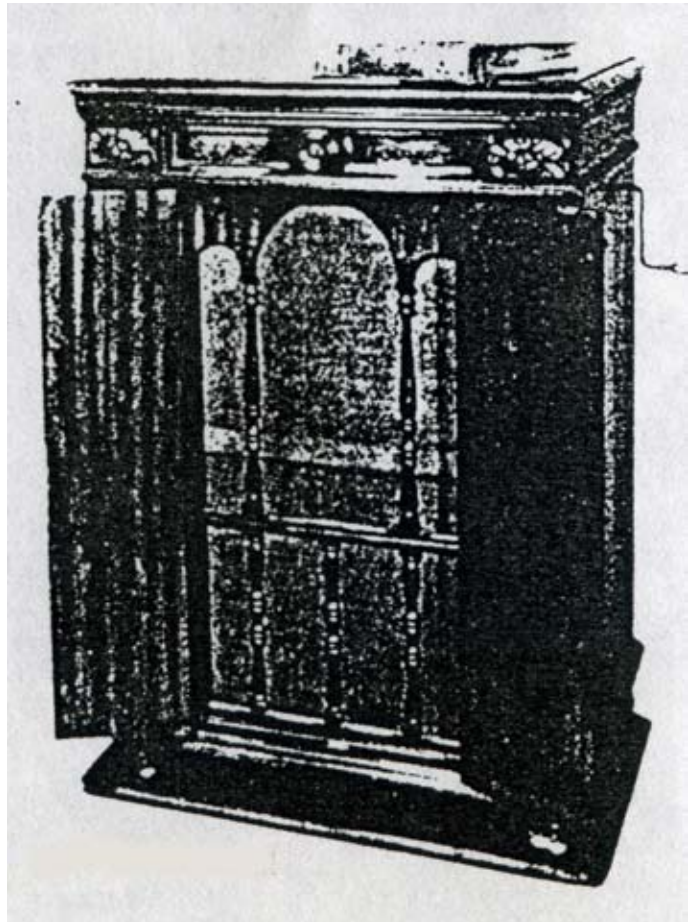
蓄音機・レコード・部品の輸入、生産額（円）					
年	輸入（円）	生産（円）	年	輸入（円）	生産（円）
明治 38	116,048		大正 5	27,256	
39	119,253		6	34,724	
40	250,036		7	62,520	
41	150,221		8	124,930	260,966
42	78,727		9	354,149	5,616,301
43	106,185		10	488,855	
44	150,566		11	891,333	
大正 1	236,480		12	1,007,884	
2	145,003		13	1,646,144	4,321,555
3	45,259	126,098	14	309,402	1,543,473
4	18,148		昭和 1	157,765	1,433,578

送が始まった。この影響も大きく、日蓄・川崎工場は「殆ど休業状態」で職工の臨時休業もおこなっている。

蓄音機の名作

「ビクトロラ・8-30・クレデンザ」（米ビクター製）は14年に発売されている。

米ビクターが、「オルソフォニック・ビクトロラ」として、新開発したものであり、その音質の良さは高く評価されている。



日本ビクター蓄音器株式会社創立前後

大正13年の輸入税は、外国レコード会社には大きな痛手であった。また国内も不景気風は収まらず、大手の日蓄も自社吹込盤が全くの販売不振で、15年末には操短、昭和2年2月には大量の人員整理を行っている。帰米していたJ.R. ゲアリーは持株（総株数の36%）を米コロンビアに譲り、同年5月より米コロンビアの経営となる。同年7月よりコロンビア・レコードを発売している。日本コロンビア蓄音器株式会社（ホワイト社長）としての正式発足は翌3年1月18日である。

外国盤を最初に国内プレスしたのはポリドールである。ポリドール（独グラモフォン社製）は、関東大震災後阿南商會が一手販売していたが、輸入税実施後国内プレスをするため、大正15年末に工場を完成させ、昭和2年4月に発売した。日本ポリドール蓄音器商會は同年5月10日に設立されている。

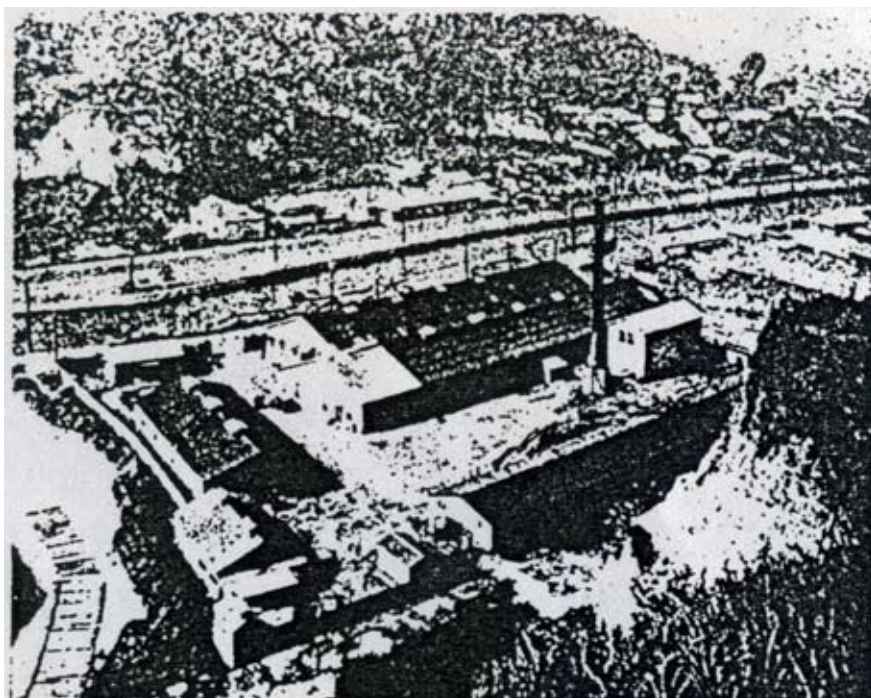
米ビクターはセール商會（明治42年1月に米ビクターの東洋総代理店としてスタートしたセール・フレイザー商會の後継）に独占販売させていたが、輸入税の打開策として日本での生産を開始するため、輸出部長のD.T. ミッチェルを日本に派遣して（昭2年4月）調査をさせた。セール商會の岡 庄五はその補佐



米ビクター
輸出部長ミッチェル

初代の代表責任者
B. ガードナー

岡 庄五



中村町工場

をした。日本ビクター蓄音器株式会社（資本金 200 万円・米ビクター全額出資）はこの岡 庄五を起用し、昭和 2 年 9 月 13 日に設立された。代表者に B. ガードナー（10 月 5 日来日）を迎え、工場はセール商会の持つ元フォードの廃工場を使い、同年 12 月 30 日より生産開始している。

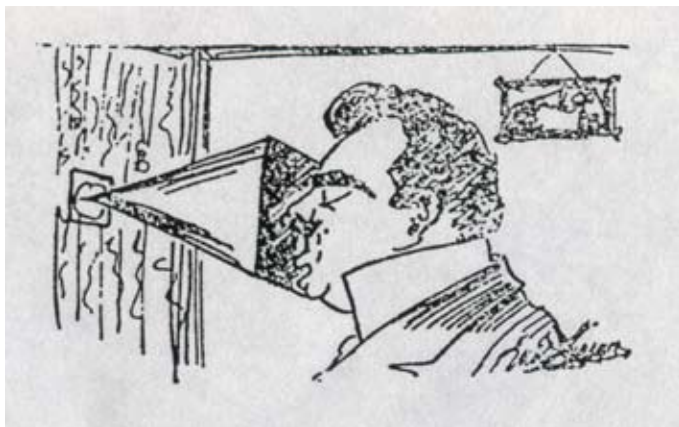
B・ガードナー ----- 日本ビクター 50 年史より -----

ガードナーは、いってみれば、仕事の人、力の人であった。仕事には常に精力的に取り組み、休日も返上して朝から夜おそくまで身を粉にして働く、という具合であった。だから、工場にはいつも活気がみなぎり、さながらフロンティア・スピリット（開拓者精神）を目のあたりにみる感があった。

ガードナーは仕事に対しては、一つのかたい信念をもつてのぞんでいた。それは一言でいえば「正義と奉仕を基調とする大家族主義こそ、企業永遠の発展の根源である」というもので、ファミリーという言葉が社内で盛んにつかわれた。この精神は今日まで一貫してビクターのなかに流れている。

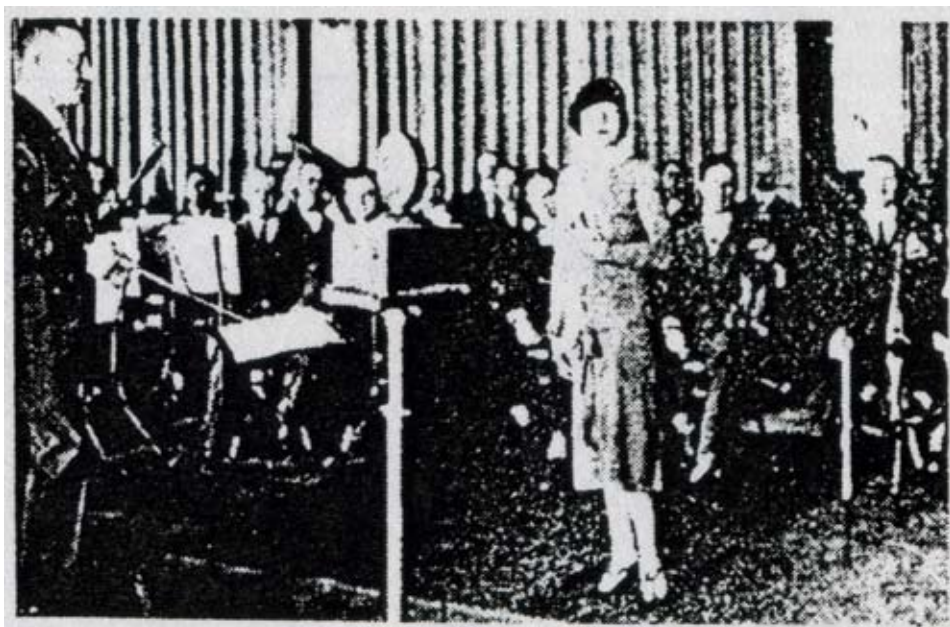
また当時、ガードナーの頭のなかには、ビクターはすべて“超一流”でなくてはならないという考え方があり、ビクターの品位をあらゆる面で高く保持することを重視した。これまた、ビクター・イメージとして、今日に受け継がれている企業的特徴の一つである。

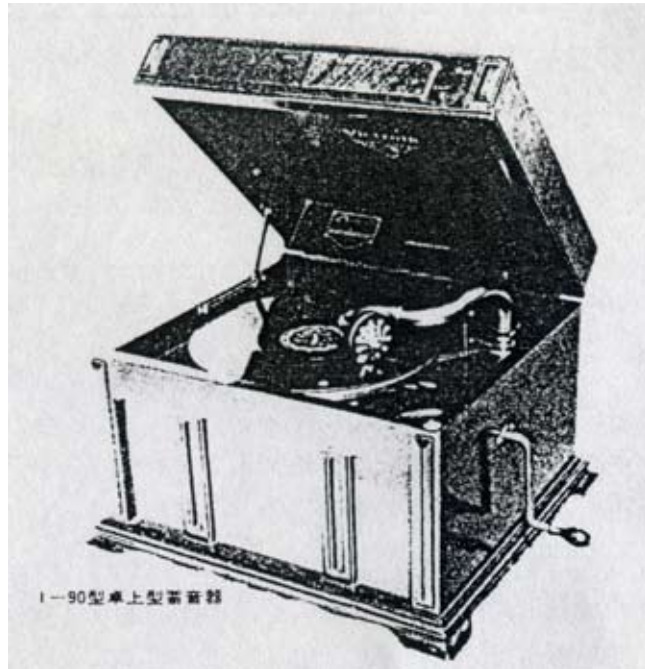
ラッパ吹き込みから電気録音へ



エジソンの蓄音機発明以来、ラッパ吹き込みと言われるように、上の漫画のようなホーンに向かっての録音がされていた。ホーンに近いと大きい音に、遠いと小さい音になるため、バランスの良い録音は非常に難しかった。

真空管が発明（1906、ド・フォーレ）され、米国でラジオ放送（1920）が始まると、レコードの音質改善に取り組むところが現れた。米ビクターも 1919 年末より実験はしているが、本格





的な行動はベル研究所（製造はウエスタン・エレクトリック）でなされた。1924年に米ビクター、米コロンビアにデモンストレーションしている。この年は両社とも販売不振にあえいでいた。米コロンビアは電気録音の権利料がなかったが、電気録音の良さを知った英コロンビアが米コロンビアを買収し、電気録音第1号契約をしている。

米ビクターも数週間後に契約したが、最初の電気録音盤は、1925年4月に米ビクターが発売している。このレコードはオルソフォニック・レコードと命名された。（コロンビアのヴィヴァ・トータル、独グラモフォンのポリファー等も同じ）

米ビクターはこのレコードを再生する蓄音機として、録音帯域の広い（従来の300～2,500Hz帯域に対し50～6,000Hz）レコードに対応した、オルソフォニック・ビクトローラ（1925）を発売した。前述したクレデンザや1-90がそれである。

赤盤と邦人歌手

日本ビクター蓄音器株式会社は、昭和3年2月1日に洋楽の第一回発売を行った。米ビクターの一流演奏家シリーズの赤盤である。原盤輸入の日本プレスであった。(150枚)

ペートーベン	協奏曲ニ長調クライスラー	35円50銭
チャイコフスキー	胡桃割 フィラデルフィア	16円
シューバート	未完成	//
ウエーバー	舞踏会への招待 コルトー	3円50銭
独唱	出船の港、出船 藤原義江	2円50銭

洋楽が東京、大阪の若者に広く聴かれるようになったのは、大正9年頃からといわれる。エルマン、シューマンハインク、ジンバリスト、クライスラー等一流の演奏家の来日演奏が行われ、愛好者が増えてきた時期でもあった。

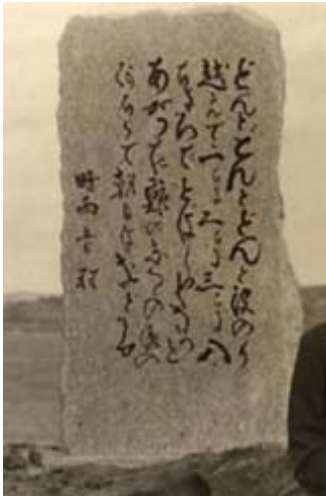
邦人最初の赤盤歌手は、テノールの藤原義江である。新国劇「沢田正二郎劇団」に戸山英二郎として入ったが、オペラ歌手になりたい望みで、東京少女歌劇団をスタートに浅草オペラに飛び込んだ。

最初のレコードは大正8年東蓄で録音した「松の葉」である。同10年イタリアに出発してからは、ヨーロッパ、アメリカを中心に公演が続く。

米ビクターへの録音は、



藤原義江と共に



同 14 (1925) 年である。

日本人として最初の赤盤歌手の誕生である。歌詞を間違った録音であったが、テスト録音ということで、そのままにしていたら発売された。

左の碑は、作詞の時雨音羽の故郷、利尻島に昭和 35 年 10 月 10 日に建立されたもの。

もう一人の赤盤歌手は関屋敏子である。

る。大正 3 年 10 才のときに三浦 環に師事し、声の美しさを認められ、昭和 2 年イタリアに出発。勉強と公演で同 9 年の帰国まで、欧、米、日を旅しているコロラチュラ・ソプラノ歌手である。

最初の赤盤は、同 4 (1929) 年で、ミラノのスカラ座管弦楽団の伴奏である。



レコード流行歌とビクターの独走

昭和3年4月1日に国内吹き込み
第一回邦盤が発売された（30枚）。
この中に初のヒットとなった「波浮
の港」（佐藤千夜子）がある。

佐藤千夜子 オペラ歌手になりたい
彼女は、大正9年東京音楽学校に
入学したが、基礎練習は苦痛であっ
た。そんな時に中山晋平に紹介され、
小諸、上田、長野と歌の旅に誘われ、
流行歌（当時は新民謡と呼ばれた）の世界に入る。



昭和4年に発売された「東京行進曲」は、空前の大ヒットと
なった。この曲は日活が菊池 寛の同名小説（雑誌キング連載）
を映画化するにあたって、主題歌をビクターへ依頼してきたも
のである。つ作詞を西条八十に作曲を中山晋平に頼んだ「映画主
題歌」の第1号である。「昔恋しい 銀座の柳 仇な年増を
誰が知る———」歌詞で親しまれ、25万枚売れている。映

画は溝口健二監督、夏用静江等主
演でこれもヒットした。彼女のヒ
ット曲には上記の他「紅屋の娘」
「当世銀座節」「愛して頂戴」
「唐人お吉の歌一黒船編」等有
る。左は「東京行進曲」の楽譜の
表紙である。

5年オペラの勉強の目的で外国
へ出発するが失敗して9年帰国、
既に流行歌界からは忘れられた存
在だった。



ジャズソングが歌われるようになったのは、「バレンシア」が、大正15年に初演奏されてからといわれる。ビクターからは3年5月にポール・ホワイトマン楽団の演奏で発売しヒットしている。

二村定一 2年10月「青空」「アラビアの唄」が発売された。二村（ふたむら）定一は浅草オペラの根岸歌劇

団に入ったのが歌手の振り出しである。4年1月発売の「君恋し」（時雨音羽作詞、佐々紅華作曲）はレコード流行歌第1号と言われる。「黒い瞳」「浪花小唄」「洒落男」等がある。

藤本二三吉 東京日本橋葎（よし）町の芸者であったが、声の艶っぽさが花柳界で評判だった。映画「絵日傘」の主題歌にピッタリということで、主題歌「祇園小唄」（5年・長田幹彦作詞、佐々社章作曲）を唄い、そのヒットで“芸者歌手”第1号となった。続いて「唐人お吉の歌一明烏編」を歌うが、これが大ヒットで全12台のプレス機フル生産でも間に合わなかったという。

今日に続く流行歌の道を開いたともいわれる。



古賀メロディーの出現

古賀政男の最初のヒット曲「酒は涙か溜息か」が、昭和6年8月に藤山一郎の唄でコロンビアから発売されると、空前の大ヒットとなった。



古賀政男

藤山一郎

「影を慕いて」が作曲としては早く、明大の学生当時（3年）

に明大マンドリン倶楽部の演奏会で佐藤千夜子が唄っている。

レコードも4年にビクターから発売されているが話題にならなかった。7年に藤山一郎が唄ってヒットさせている。

古賀政男は子供の頃朝鮮に育ち、「ヨナ抜き」晋平節の流行の中で、日本的な哀調味をただよわせながらも、朝鮮の俗謡に流れる哀愁味をつきまぜ、独特の頹廢感をもった曲である。

藤山一郎は東京音楽学校在学中で、レコード吹き込みが学校側に知れて、退学処分になされた。1ヶ月の停学である。

「酒は涙か溜息か」に続いてヒットした「丘を越えて」（島田芳文作詞、古賀政男作曲）は、伴奏にアコーディオンを初めて使ったものであったが、50～60万枚売れたという。

昭和6年以降は、ビクター、コロンビア更には新設のキング（5年）、タイヘイ（6年）、テイチク（7年）と競争に輪を掛けた。古賀政男も9年にテイチクに移っている。



昭和初期ヒット流行歌		
昭和	ビクター	その他
3	披浮の港 (佐藤千夜子) アラビアの唄 (二村定一) 出船の港 (藤原義江)	道頓堀行進曲 (筑波久仁子・ニットー)
4	君恋し (二村定一) 東京行進曲 (佐藤千夜子) 紅屋の娘 (佐藤千夜子) 浪花小唄 (二村定一)	杵掛小唄 (曾我直子・コロ)
5	祇園小唄 (藤本二三吉) 唐人お吉の唄—明烏編 (藤本二三吉) アラその瞬間よ (藤野豊子)	酋長の娘 (富田屋喜久治・ポリドール) ザッツオーケー (河原喜久恵・コロ)
6	女給の唄 (羽衣歌子) 侍ニッポン (徳山 璉) わたしこのごろ変なのよ (四家文子) 巴里の屋根の下 (田谷力三)	酒は涙か溜息か (藤山一郎・コロ) 丘を越えて (藤山一郎・コロ) 私比頃憂鬱よ (淡谷のり子・コロ)
7	銀座の柳 (四家文子) 天国に結ぶ恋 (徳山 璉・四家文子) 涙の渡り鳥 (小林千代子)	影を慕いて (藤山一郎・コロ) 時雨ひととき (渡瀬春枝・ポリドール)
8	島の娘 (小唄勝太郎) 天童下れば (市丸) 東京音頭 (小唄勝太郎・三島 一声)	ほんとにそうなら (赤坂小梅・コロ) サーカスの唄 (松平晃・コロ)
9	さくら音頭 (徳山 璉・三島 一声・ 小唄勝太郎)	赤城の子守唄 (東海林太郎・ポリドール) 急げ幌馬車 (松平晃・コロ) ダイナ (ディック・ミネ・テイチク)
10	無情の夢 (児玉好雄)	野崎小唄 (東海林太郎・ポリドール) 船頭可愛や (音丸・コロ) 二人は若い (ディック・ミネ・テイチク)

ラジオ放送と蓄音機の競争

アメリカでラジオ放送が1920年に開始されると、1922年よりラジオ・ブームが始まった。蓄音機にラジオを組み込むラジオ付き電気蓄音機が、RCA社との契約の下に、ブランズウィック社から1923年に発売されている。

「ラジオはビクターの競争相手でもなければ、蓄音機の代用物でもありません」（1923・エルドリッジ・ジョンソン）と強気だったが、1925年5月にはRCA社とラジオ付き蓄音機の契約に追い込まれている。発表は11月2日で大成功を収めた。

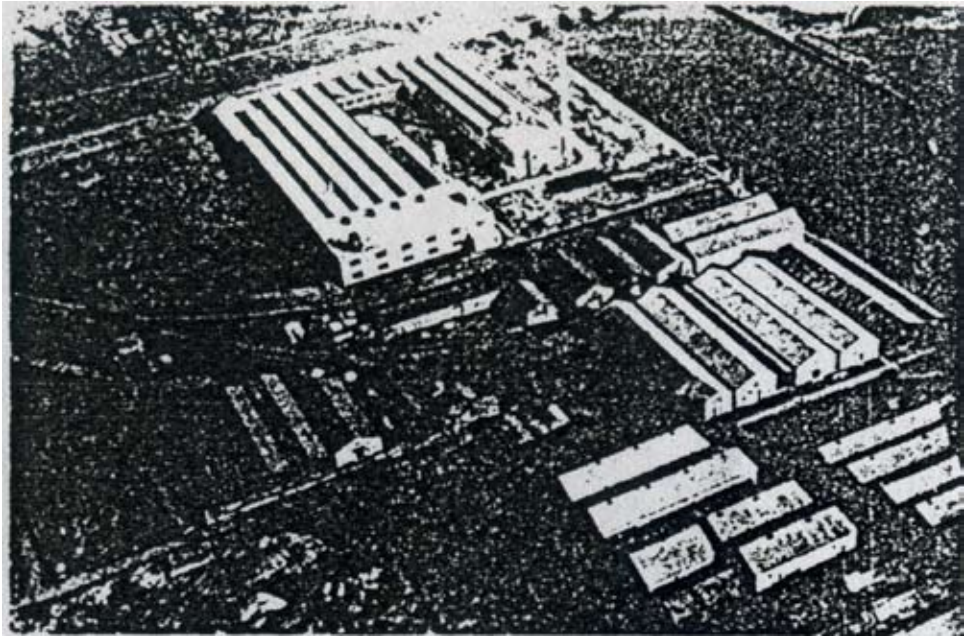
1924～5年頃は崩壊寸前だった米ビクターが、1926年には未曾有の利益となりそうであったが、ジョンソンは先行きの困難を見越して、蓄音機事業から手を引く決心をし、タイミングよく申し出てきたスパイア銀行とセリグマン銀行に、売り渡した。

1928年になると、米ビクターとRCAの合併交渉が取り沙汰されだし、1929. 1. 4（昭和4年）に調印されている。なお、この年日本ビクターも三菱合資、住友合資が資本参加し、日米合併会社となっている。

一方米コロンビアは苦しい経営が続いている。1925年英コロンビアに買収された後、1930年その支配下を離れたが、1932年にはグリグスピー・グルナウ社の支配下に入り、1934年にはアメリカン・レコード社に買収され1938年になってCBS社（1927創立）に買収されてやっと落ち着いた。

ヨーロッパの業界は、アメリカ程の浮き沈みは無かったが、（ラジオ放送がアメリカ程には、有力でなかった）1929年の大恐慌の影響は、1931年3月に行われたEMI（英グラモフォンと英コロンビアの合併）設立となった。更にカタログに珍しい曲目を揃えようという「協会」（予約制度）の成功で、アメリカとは別の道を歩いている。

工場設立後の日本ビクター



昭和5年12月6日盛大な落成式を挙行了した横浜工場は、ビクター製品の完全国産化を目指したものである。

(6年) J2-40 (ポータブル)、JRE-31 (ラジオ・エレクトロラ)

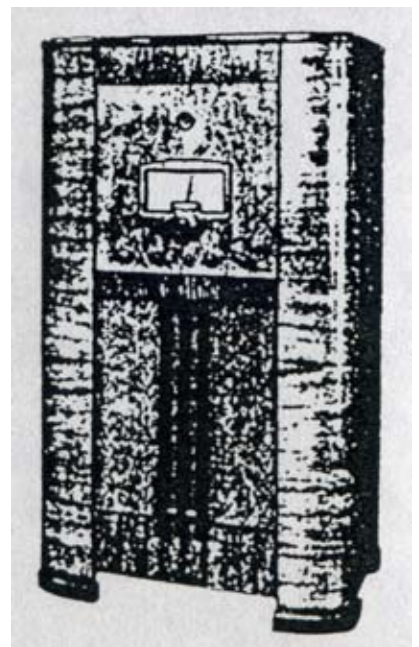
(7年) RE-41 (エレクトロラ)、33 1/3 回転 / 分レコード・

トランスクリプション発売

(8年) JRE-42 (2スピード・エレクトロラ)

と順次力を付けて行く。

ラジオの1号機は、10年に発売された、JR-120型である。6球式スーパーヘテロダイン・ラジオで音色の美しさは他を圧倒したと言われる。右の写真は12年発売のRE-48で戦前の電蓄の決定版といわれ名器の呼び声が高い。



昭和 10 年代—第二次世界大戦時代

太平洋戦争は昭和 16 年 12 月 8 日に始まるが、その芽は 6 年 9 月 18 日の満州事象 12 年 7 月 7 日の盧溝橋爆破（日支事変）にあった。

軍歌の歴史 明治時代の流行歌は「とことんやれな節」に始まるが、これは又軍歌の第 1 号でもある。江戸城明け渡しを目指して京都から江戸に向かった官軍が歌ったものである。

抜刀隊（明 18）、上敵は幾万（24）、婦人従軍歌（27）、勇敢なる水兵（28）、軍艦（30）、戦友（38）等、日清戦争や日露戦争時代に多くの曲が作られている。

大正時代には砲兵の歌（大正 14 年）があるが、昭和になってから活発になった。爆弾三勇士（昭和 7 年）、討匪行（8）、祖国の護り（10）、露営の歌（12）、海行かば（12）、愛国行進曲（12）、皇国の母（13）、日の丸行進曲（13）、麦と兵隊（13）と続く。

業界事情 9 年から内務省がレコード検閲を始め、12 年には「忘れちゃいやよ」（渡辺はま子・ビクター）等が自主原盤破棄を指令された。

翌 13 年には、蓄音機・蓄音機針に鋼鉄使用禁止令が出され、レコード原料も輸入困難になる。14 年に入ると、前線将士のために「レコード・蓄音機献納運動」が新聞社を中心に起こり、戦時体制下に入っていく。14 年以降 20 年までは（20 年には殆ど生産されていない）、軍歌オンパレードで、士気を高める曲に集中している。今に歌われる「同期の桜」（西条八十作詞）は 13 年の作である。



軍歌以外

- 11年 東京ラブソディ (藤山一郎)、忘れちゃいやよ (渡辺はま子)、椰子の実 (東海林太郎)
- 12年 妻恋道中 (上原敏)、別れのブルース (淡谷のり子)
- 13年 支那の夜 (渡辺はま子)、満州娘 (服部富子)
- 14年 上海の花売娘 (岡晴夫)、大利根月夜 (田端義夫)、一杯のコーヒーから (霧島昇)、
- 15年 隣組 (徳山瑳)、きらめく星座 (灰田勝彦)
湖畔の宿 (高峰三枝子)、蘇州夜曲 (霧島昇)
- 16年 めんこい仔馬 (二葉あき子・高橋祐子)
- 17年 新雪 (灰田勝彦)、婦系図の歌 (小畑実)
南の花嫁さん (高峰三枝子)
- 18年 勘太郎月夜唄 (小畑実)、お使いは自転車に乗って (轟夕起子)
- 19年 月夜舟 (波平暁男)
- 20年 お山の杉の子 (安西愛子)

戦争が厳しくなるにつれ、軍歌以外の曲をレコード化することは困難になった時代である。

敵性語・音楽の禁止 18年になると社名も日本ビクターが日本音響、日本コロンビアが日蓄工業、ポリドールが大東亜航空工業、キングが富士音盤、テイチクが帝国工業となり、レコードも音盤と呼ばれる。ジャズ・レコードも販売禁止となった。

日本音響も軍需工場に指定され、電波探知器 (レーダー) 等の生産をおこなっている。アメリカもシェラックの非軍事使用は70%カットされ、戦時中は暗黒の時代であった。



昭和 20 年 8 月 15 日戦争は終わった

社名まで変えさせられた、各会社は元の名称を復活する。日本ビクター (20. 12. 29)、日本コロムビア (21. 4. 1)、ポリドール (21. 6.) である。戦災を免れたコロムビアは 20 年 11 月からレコード生産を開始したが、材料がなく 33,275 枚しかプレスしていない。古いレコードを回収しては再生使用していた時代が始まる。こんな時、並木路子の歌う「リンゴの歌」(松竹映画「そよ風」20. 10. 11 封切の主題歌) が大ヒットし、販売店では仕入れるのに他のレコードと抱き合わせ仕入しか出来なかったという。



ビクターは工場を戦災にあい、レコードの生産は全く駄目。日本光学の工場を買い、ラジオの生産を始める。レコードはコロムビアにプレスを依頼 (原盤は幸いにも残っていた)、21 年 10 月に復刻盤 (きらめく星座、森の小径) を発売した。吹き込みもコロムビアのスタジオを借り、「港が見える丘」(22 年 3 月発売・平野愛子) 等を 22 年 1 月より行っている。築地のスタジオが復旧したのは、同年の 12 月 25 日のことである。

在来の歌手に加え、多くの新人が出現した。美空ひばり (悲しき口笛)、江利チエミ (テネシーワルツ)、雪村いずみ (オーマイパ) の 3 人娘もこの頃である。織井茂子「君の名は」も大ヒットした。



昭和初期にアメリカ資本だった、ビクター、コロムビアとも日米関係が険悪になるにつれアメリカ資本の手を離れた。日本蓄音器商会（コロムビア）は10年に共立企業、日本ビクターはRCAが11年に日本産業へ持株を譲渡、その後12年に両社とも日産コンツェルンに移るが、半年程で東京電気（東芝）に又移る。RCAビクターの持株も13年2月に撤収された。

戦後は、GHQ（連合軍最高司令部）から制限会社の指定を受け（21.3）、コロムビア、ビクターとして独立した。レコード生産枚数は、21年342万枚、22年884万枚、23年1,196万枚、24年1,685万枚と急上昇している。

米コロムビアは1948年（昭和23）6月21日アストリア・ホテルでLP(Long Playing)盤の試聴会を開いた。4分間の細切れ音楽からの脱皮である。会場には325曲（LP101枚）と、それと同じ曲のうずたかいSPが置かれたという。

日本コロムビアでは原盤、レコード材料（塩化ビニール）を輸入してプレス発売したのが、26年4月のことである。

*「交響曲第九番（ベートーベン）」ブルーノ・ワルター指揮
 ニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団（WL-5001-2）

RCAビクターは、チェンジャーで次々とレコードを変えやすい45回転盤（EP）を1949（昭和24）年に発表した。

28年に全工程国産化でLPを発売した日本ビクターは、EP国産化にも取り組み、苦心して成功させ、「ブルー・カナリヤ」（EP-1001）を29年発売した。なお、この年松下電器の傘下に入っている。



昭和 30 年代－ SP の終焉とステレオ・レコード

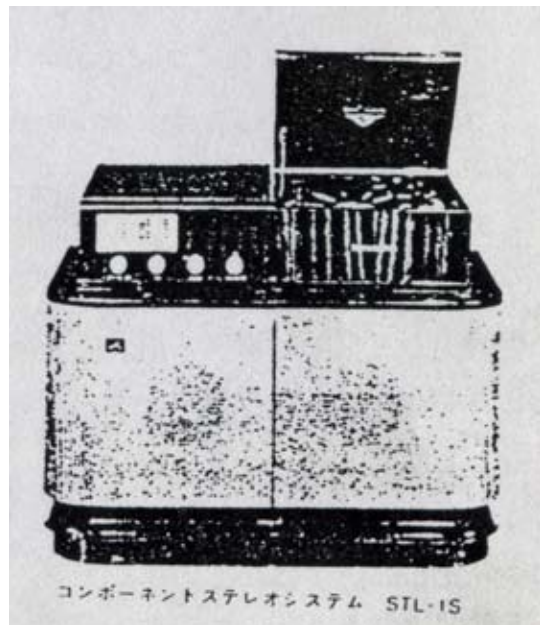
LP、EP が発売されても、SP しか演奏出来ない蓄音機が普及している状況では、即切り換えは出来ず、38 年頃まで SP 生産は続いたが、新譜は 36 年 964、35 年 414、36 年 139 と激減する。32 年の「有楽町で逢いましょう」は SP 盤最後のヒット曲である。



ステレオは放送とテープが早かった。NHK ラジオの第一放送、第二放送で左右の音を実験放送したのが 27 年 12 月であり、「立体音楽堂」としての定時放送化は 31 年 4 月からである。テープはモノラルで販売開始され、急激に伸びた。ステレオ音楽テープは、米ヴォックス社が 1953 (28) 年に発売しているが、日本では 31 年発売である。

レコードの 1 本溝にステレオ音を録音する研究は、英 EMI のブルムラインが 1931 (6) 年に特許申請しているのに始まる。1955 年英デリカ社が VL 方式を完成、1957 (32) 年にウェストレックスが 45-45 方式を発表した。

日本ビクターでは RCA から送られてくる放送用のステレオ・テープを聴くに及んで、31 年ステ



レオ・レコードの開発へと邁進することとなる。種々の実験から 45-45 方式に辿りつくが、特許申請してみると、フルムラインと同じであった。期限は既に切れていた。

アメリカでウェストレックスがステレオレコードの実演をしたのが、同じ年の 10 月だったが、それは日本ビクターの申請の僅か半月後であった。

ステレオの商品化が急がれ、演奏装置 (STL-1S) は 33 年 4 月そしてステレオ・レコードは 8 月新譜として発売された。

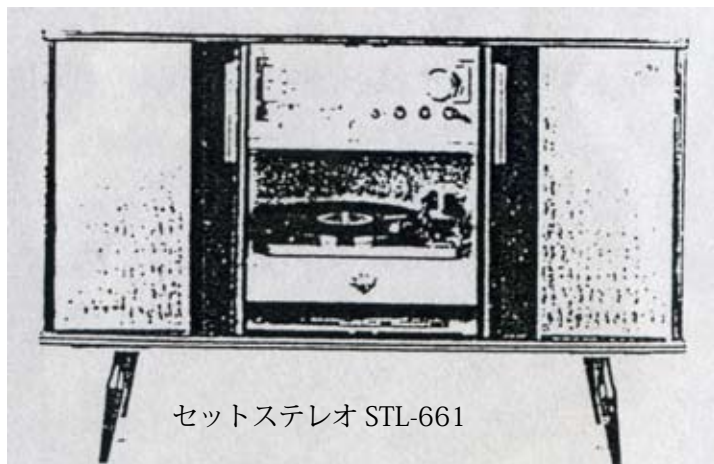
*「ピアノ協奏曲第一番 (チャイコフスキー)」(ピアノ)

エミールギレス、フリッツ・ライナー指揮シカゴ交響楽団
(SLS2001)

この後は急激にステレオ化が進み、特に日本ビクターは急成長を遂げる。

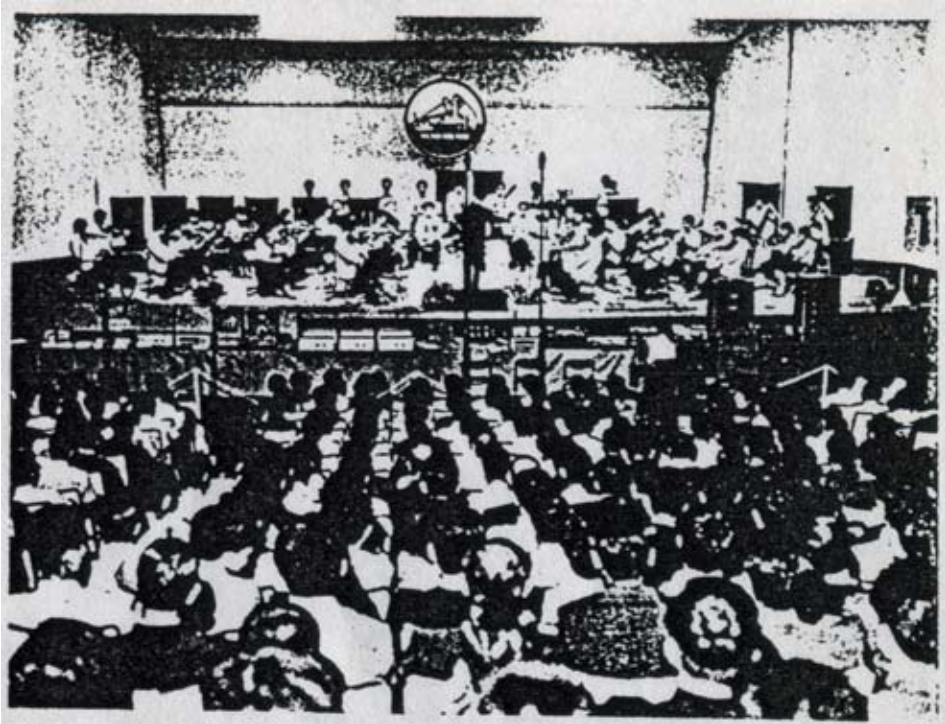
31 年に資本金を 1.5 億円に増資後、毎年のように増資し、38 年には 36 億円になっている。

右は 39 年発売の大ヒット機種。

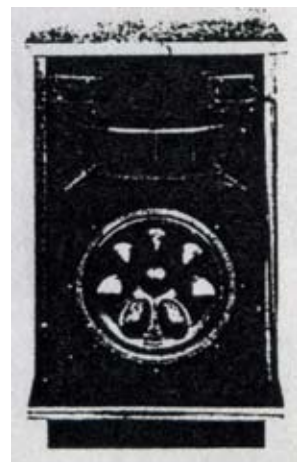


セットステレオ STL-661

音場への挑戦—昭和 40 年代

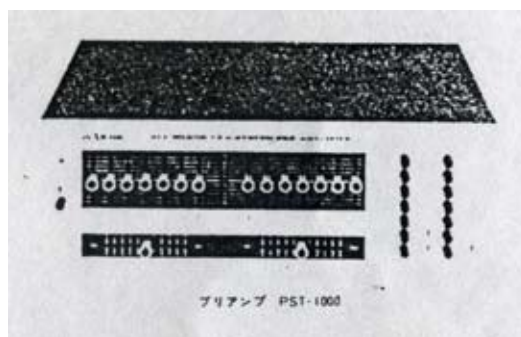


生演奏とレコード再生のすりかえ実験 段帳が上がると 42 名編成のロイヤル・ハーモニック（日本フィルハーモニー交響楽団選抜メンバー）が控えていた。左手より指揮者の服部克久が登場し一礼後指揮台に登る。ステージ前面に置かれたレコード・プレーヤに針が降ろされ、アンプのポリウムが上げられた。やがてスピーカから・譜面台を指揮棒で魂叩く音が出る。それを合図に演奏が始まった。同時に舞台右手の電光掲示板の数字が 5 秒毎に変わって行く。昭和 41 年 7 月 14 日、このようにして世界初のオーケストラとレコードのすりかえ実験が、東京・虎の門ホールで始まった。曲はビゼー作曲「カルメン」組曲から「ハバネラ」である。



生演奏で始まった演奏が、どこでレコード再生に変わったかを、電光掲示板の番号で、入場者に答えて貰おうというのである。演奏は順調に進んでいく。演奏者はレコードに変わった時から、手振り身振りだけで音を出さないようにした。そして最後に近づくともそれも止めてしまった。聴いていた多くの人は、演奏が終わって「アレー！何処で変わっていたのかな？」と、自分の耳を疑ったようである。

立会審査を勤めた方々も、「これでは判からかないだらう」と肩の荷が降りた様子である。

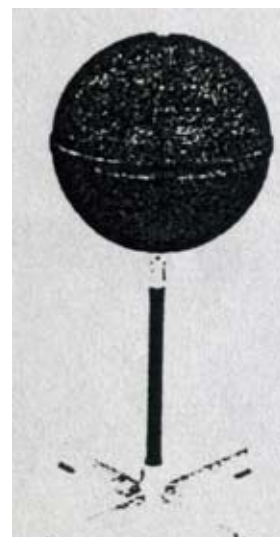


アンケートの結果は、1,621名中14名が正解であった。掲示板番号は1から45まで変わったが、「12」の時にすりかわっていた。音響評論家やマニアも判からなかったと言う。

実験は成功したが、事前準備は大変であったと同時に、その後の商品づくりの方向を考えさせる貴重な体験であった。

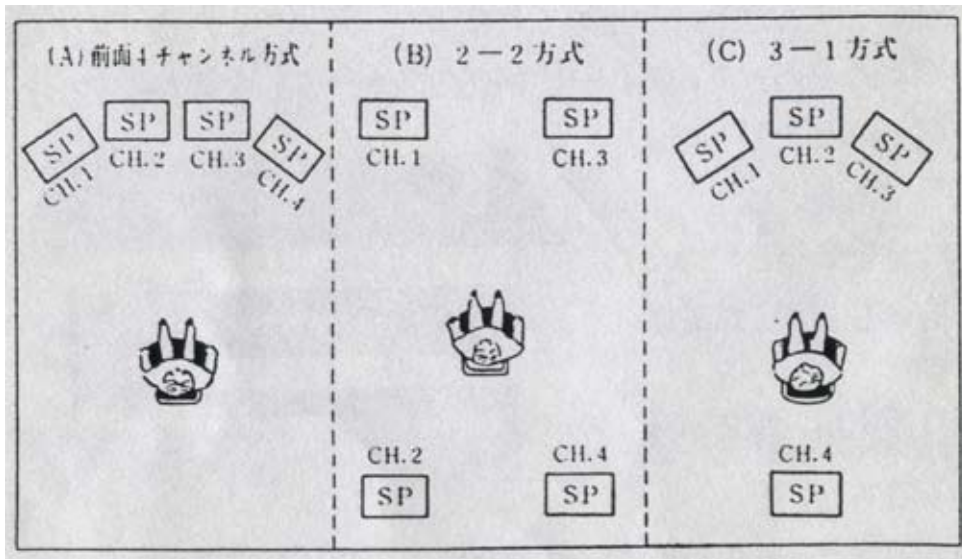
都合3回のリハーサルでは、座席で聴く音が生演奏とレコード再生とでは全く違っていたからである。

問題は大きく分けて二つあった。一つは楽器とスピーカの指向性の違いから生じていた。二つ目は指向性の違いから生じる、壁面などでの反射音の周波数特性差であった。周波数特性差はSEA グライコで調整し、スピーカも対策した。PST-1000、GB-1、はこのようにして生まれたのである。



マルチチャンネルと CD-4 生演奏とレコードのすりかえ実験は、前年の昭和 40 年にもジャズ・バンドで行っており、音場に対しての追求は止むところがなかった。

45 年 5 月に発表された MCSS (Multi Channel Source



System) は、2つだけのスピーカーから出すステレオ音で得られない「音の広がり感」「奥行き感」を求めようとしたものである。

スピーカーの置き方には3種類が提案された。

前面4チャンネル(4-0)方式は、定位感がよく広がり感のある自然な臨場感が得られると推薦された。

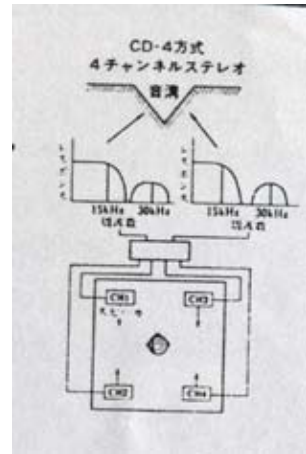
2-2式は再生音の動きがリアルに表現でき、新しいソフトが期待された。3-1方式は中間的なものである。

ソフトは最初にテー



ーフで発売された。(オープン型)

アメリカでも4チャンネルの開発競争となり、米AR社(3-1方式)ヴァンガード社(2-2方式)が同年8月に発表している。(テープ)



レコードによる4チャンネルは、まず日本ビクターが45年9月に発表したCD-4方式ディスクリット4チャンネルである。レコードに50kHzにも及ぶ録音をする新技術の開発である。また「シバタ」針と呼ばれる新針は後のレコード再生に多大な影響を及ぼしている。46年6月に発売され将来が期待された。(2-2方式)

46年CBSソニーがSQ方式を発表、更にはRM方式を各社が独自の回路で実施するに及んで、日本電子機械工業会で47年4月にCD-4、RM、SQの3方式に集約する。

RMもSQもマトリックス方式である。

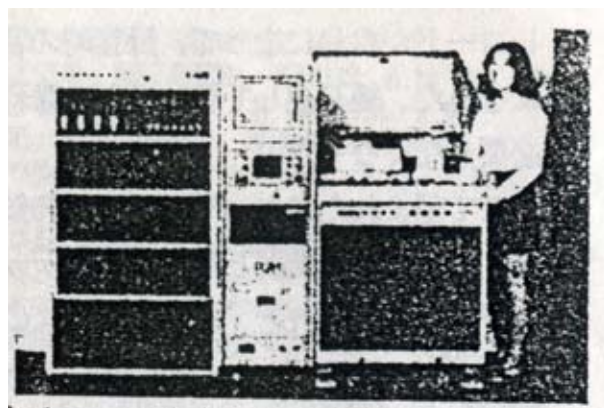
4チャンネルの良さが判るソフトの提供が難しく、51年頃より下火となった。

右はCD-4レコード最初の発売「驚異のCD-4サウンド」のレーベルである。



47年に日本コロムビアは、NHK技術研究所と共同で、PCM録音装置を開発した。重さ2トンにもなる大がかりな装置であったという。

従来のテープ録音の工程にこの装置を使い、テープでの音質低下を防いだのである。



このようにして作られたレコードを「PCM録音」レコードとして発売した。鮮明な音色、切れのよい迫力ある再生音は、多くの音楽愛好家から称賛されたという。

このようにして始まったPCMは、その後「デジタル」として広く知られるようになるが、最初は日本コロムビアと同じく、音楽制作用であった。



最終のお客様に、デジタルのまま音楽を提供しようと最初の光学式DAD（デジタル・オーディオ・ディスク）を公開したのは、52年のフィリップスである。各社とも研究していたので、規格統一が叫ばれて53年DAD懇談会が発足した。

56年規格も定まりCD（コンパクト・ディスク）が57年10～11月各社一斉に発売された。



デジタルの花開く－昭和 60 年代

レコードが CD になって、録音時の音がそのまま楽しめるようになった。繰り返して聴いても、摩耗による音質劣化を考える必要もなくなった。

そこで望まれたのが、デジタルでの録音・再生機器である。録音・再生できる機器としてテープデッキがあるが、カセットテープは便利だけれど、テープノイズに悩まされ、雑音低減装置（ドルビー B 等）も、一時凌ぎに過ぎなかったといえる。

昭和 62 年春、遂に DAT（デジタル・オーディオ・テープ）が発売され、繰り返して録音・再生しても音質劣化が全くみられなくなったのである。－究極の装置の出現である。－

デ ジ タ ル の 種 類					
種 類	標本化周波数 (kHz)	量子化 ビット数	チャンネル数	最大時間 (分)	他
C D	44.1	16 リニア	2	74	再生
A H D	44.1	16 リニア	2、4	240、120	再生
レーザーディスク	44.1	16 リニア	2	120	再生
D A S	44.1 (44.056)	16 リニア	2	60、120	録再
R - D A T	48	16 リニア	2	120	録再
	44.1	16 リニア	2	90、120	再生
	32	16 リニア	2	120	録再
	32	12 ノン	2、4	240、120	録再
S - D A T	48	16 リニア	2 × 10	90	録再
	44.1	16 リニア	2 × 10	98	再生
	32	16 リニア	2 × 10	135	録再
	32	12 ノン	2 × 10	180	録再
				4 × 5	90
1/2 ビデオ (V H S)	44.1	14 リニア	2	160、480	録再
8 ミリビデオ	31.5	8 ノン	2		録再

参考文献

- 堀内敬三「音楽五十年史」鱒書房・昭和 17・12・10 初版
 園部三郎「日本民衆歌謡史考」朝日新聞社・昭和 37・8・10 第 1 刷
 日本ビクター「音に生きる」ダイヤモンド社・昭和 38・9・10
 戸板庸二「女優の愛と死」河出書房新社・昭和 38・12・1 初版
 日本ビクター「音・その歩み・その夢」ダイヤモンド社・昭和 42・9・13
 八巻明彦「軍歌でみる日本戦争史」勤文社・1967・11
 高橋磯一「流行歌でつづる日本現代史」新日本出版社・1971・2・20、4 版
 岡俊雄「レコードと音楽とオーディオと」ステレオサウンド
 (季刊ステレオサウンド 1974 WINTER 別冊) 昭和 49・12・15
 結城亮一「あゝ東京行進曲」河出書房新社・昭和 51・7・30 初版
 森本敏克「音盤歌謡史」白川書院・1976・12・1 第 1 版第 2 刷
 NHK「放送の五十年」日本放送出版協会・昭和 52・5・10 第 2 刷
 松尾健司「日本歌謡碑大系」(歌曲集) ゆまにて・1977・4・25 初版
 (歌謡曲集一上) ゆまにて・1977. 9. 25 初版
 「世界のオーディオ VICTOR」ステレオサウンド・昭和 52・10・31
 クルト・リース「レコードの文化史」音楽之友社・昭和 52・12・20 第 2 刷
 (佐藤牧夫訳)
 「昭和の流行歌手」毎日新聞社・1978・1・1
 倉田善弘「日本レコード文化史」東京書籍・昭和 54・3・28 第 1 刷
 「女性芸術家の人生 9」集英社・昭和 55・2・20 初版
 森本敏克「レコードの一世紀・年表」沖積舎・昭和 55・6・2
 今西英造「演歌に生きた男たち」文一総合出版・昭和 55・6・10 第 1 刷
 ローランド・ジェラット「レコードの歴史」音楽之友社・
 (石原範一郎訳) 昭和 56・10・20 第 1 刷
 飯田正信「商魂」実業之日本社・昭和 56・11・25
 牛島秀彦「藤原義江」読売新聞社・1982・7・15 第 1 刷
 渡辺議「関屋敏子の生涯」島田音楽出版・昭和 59・8・1 初版
 池田憲一「昭和流行歌の軌跡」白馬出版・昭和 60・6・1 初版
 岡俊雄「レコードの世界史」音楽之友社・昭和 61・2・10 第 1 刷
 喜早哲「うたのふるさと紀行」日本放送出版協会・昭和 61・3・2 第 1 刷
 「CD・AV ウンチク学」(サウンド・トップ別冊 No 2)
 技術新聞社・昭和 61. 6. 1
 レコード「ほるぶ歌謡百年」(大正編) 奥書・ほるぶ・
 昭 50・5・15 第 3 刷
 レコード「RCA ジャズ 50 年史」奥書・日本ビクター

発行 昭和62年9月13日
制作 日本ビクター株式会社
人材開発センター
川井一正著
印刷 ビクター興産
プリント部
(社内研修用)

復刻版作成

平成24年9月13日
前北 勝司